

ESD大学生リレーシンポジウムを開催



午前の部オープニングの様子

ESD 大学生リレーシンポジウム「地域協働で減災ルネサンス」が、8月23日(土)、東山キャンパスにおいて開催されました。このリレーシンポジウムは、愛知学長懇話会が、ESD (Education for Sustainable Development) 10年の最終年となる今年11月に愛知・名古屋で「ESD ユネスコ世界会議」が開催されるにあたり、1月から全7回シリーズで開催しているもので、今回は第6回目にあたります。

このリレーシンポジウムは、「ESD ユネスコ世界会議」で取り上げるテーマから、各大学で取り組んできた教育・研究活動を発表し、多くの方から理解を得るとともに、特に大学生の視点から考え、学び、議論することを通じ、持続可能な未来を構想できる人材、すなわち、ESDの視点を持った活力ある人材を育成することを目的に行っています。

今回、本学では、「災害と持続可能性」をテーマとし、「地域協働で減災ルネサンス」と題して、防災・減災活動を前向きに捉え、日常的な協働を活性化することで地域の新たな活力を生み出し、減災ルネサンスともいべき地域社会の新しい展開を目指してシンポジウムを開催しました。



トークセッションの様子



あいさつする総長

午前の部は、ES 総合館、野依記念学術交流館等に分かれて「若者が考える：未来の防災・減災社会」、「市民の自慢：なるほど防災・減災ことはじめ」、「企業人大集合!! 防災・減災ことはじめ」、「自治体発!! 地域協働のススメ」、「研究者が考える：魅せる減災まちづくり」の5つのワークショップが開かれ、それぞれの立場で考える減災について討論、意見交換、発表を行いました。午後の部では、豊田講堂ホールで約330名が出席し、本学卒業生のラジオDJである磯谷祐介氏の司会のもと、室崎益輝公益財団法人ひょうご震災記念21世紀研究機構副理事長による基調講演、「減災の取り組みと地域協働のあり方」が行われました。講演の後、午前に行われた「若者が考える」のワークショップであいちESDアワードに選ばれた、愛知県立知立東高等学校及び名古屋学院大学からの発表と表彰式が行われました。引き続き、福和減災連携研究センター長の進行のもと、各ワークショップの代表者によるトークセッションが行われ、各ワークショップでの成果を共有し、世代や立場を超えて協働の大切さを確認しました。コメンテーターとして登壇した濱口総長や鮎京理事はそれぞれ医学、法学分野の研究者としての立場から、今後の防災・減災活動のあり方への助言を述べ、シンポジウムは盛況のうちに閉会しました。

「『備える 3.11から』ライブ!」を開催

●減災連携研究センター

減災連携研究センターは、8月24日(日)、豊田講堂において、中日新聞社との共催により「『備える 3.11から』ライブ!」を開催しました。この催しは、同センターも協力している中日新聞掲載「備える 3.11から」の連載100回を記念して開催されました。

当日はまず、豊田講堂ホワイエ・アトリウムにおいて、「被災者の生の声」と題して、東日本大震災の被災者2名、伊勢湾台風の被災者1名の方への公開取材が行われました。東日本大震災で被災した女性からは、建物の屋上で津波の波しぶきを浴びながら待避した経験や、避難所での炊事等の仕事が不安や恐怖を紛らわした経験などが語られました。

引き続き、ホールにおいて被災者手記の朗読が行われ、東日本大震災で被災した方による悲痛な思いを綴った手記や失ってしまった人の結びつきに改めて感謝を示す詩が朗読されました。被災者の方へのインタビューでは、亡くなった方は戻らないが、教訓を未来で役立たせることが大切であることが語られました。



ペーパークラフト実験の様子



防災クイズの様子

座談会「被災地の記者たち」では、手書きの壁新聞「石巻日日新聞」の記者による体験談として、被災直後、被災地で求められたのは食料と情報であったことが述べられました。河北新報社の記者からは、「広く浅く」ではなく、地域に応じた「狭く深い」防災報道の必要性が述べられました。また、阪神大震災を取材した記者からは、阪神大震災を風化させない記事作りの紹介がありました。最後に福和減災連携研究センター長による「防災クイズ」が行われ、イベント参加者全員が参加しました。クイズの内容は、津波の速さやマグニチュードの意味、防災グッズに関すること等、地震に関わる知識や備えについて様々でした。

また当日は、タイアップ企画として減災館の見学会が実施されました。午前には、「建物まるごと振動実験」として、同館の免震装置を活用した、変位10cmの建物の加振実験が行われました。3回の実験で延べ600人の来館者があり、建物の揺れを体感するとともに、ビデオ映像を通じて同館の災害対応拠点としての機能について学びました。

午後からは「夏休み・スペシャル減災教室」として、同館の1階、2階の全体を使った小中学生向けの体感型学習イベントが行われました。台車を綱で引っ張ることによる長周期地震動体感、「10秒呼吸法」による災害時に心を落ち着かせる訓練、リアルな木造建物模型を使った耐震補強理論の学習、ペーパークラフト模型とストロー模型を使った地震に強い家づくり講座、ダミー人形を使った家具転倒被害の実験、空気砲を使った気圧観測機器のデモンストレーション、大型防災カルタ大会、防災紙芝居が実施され、70名ほどの親子連れが参加しました。参加した小中学生たちは各コーナーを回ってスタンプを集めることで参加賞を獲得し、熱心に参加する様子が見られました。

第2回地球教室を開催

●博物館

博物館は、8月23日(土)、24日(日)の2日間、今年度2回目となる親子フィールドセミナー「地球教室」を開催しました。この催しは、博物館と名古屋市科学館との連携事業の1つであり、フィールドでの標本観察・採集とラボでの実習を組み合わせた体験学習型の地域貢献活動です。

今回は「河原で宝石と歴史を見つけよう！」というテー



砂に含まれる鉱物を顕微鏡で観察する参加者の様子

マのもと、宝石は買うもの、歴史は本から学ぶものだけではなく、小さなものでも宝石や歴史を自ら発見することの楽しさをフィールド体験から参加者に感じてもらうことを目的に開催されました。夏休みの終わり近くに開催された今回の教室には80名近い応募があり、抽選で選ばれた小中学生と保護者及び一般の方をあわせて28名が参加しました。

1日目は、岡崎市の矢作川に出かけて、パンニングという方法を用いて川砂の中から比重の大きい鉱物を選別しました。2日目には、同館の実験室に場所を移して、川から採取した砂をシャーレにのせ、それを実体顕微鏡でのぞきながら砂に含まれる様々な鉱物を観察しました。鉱物の形や色、磁性を調べながら、ガーネットや磁鉄鉱、白雲母などを分類しました。また、観察に加え、矢作川周辺の歴史や土器・陶器について講義が行われました。川砂の採集・観察では、児童・生徒に加えて保護者の方々も体験に没頭している姿が印象的でした。この催しは、活動補助のために、愛知大学名古屋一般教育研究室の援助を受けています。

高校生防災セミナーを開催

●減災連携研究センター

減災連携研究センターは、7月24日(木)、25日(金)、28日(月)、8月26日(火)、減災館において、高大連携高校生防災教育推進事業「高校生防災セミナー」を開催しました。このセミナーは、将来的に、巨大地震等による大災害を経験する可能性がある高校生を対象として、災害発生の科学や減災対策、災害と付き合う知恵、「生きる力」を学



減災ホールでの高校生の発表の様子

び、自立して活動できる防災リーダーになってもらうことを目的として開催され、今年で5年目となります。夏休み期間中の4日間、座学・実学による学修と2学期の実践活動、年末の活動成果発表会から構成されており、今年度は新たに県内の高等学校15校から、高校生・教員合わせて75名が参加しました。

セミナーでは、同センター関連教員による地震や液状化、津波災害の発生メカニズムやその対策、防災・減災とまちづくり、災害医療に関する講義、愛知県防災局によるHUG（避難所運営ゲーム）、NPOによる防災ボランティアの役割に関する講義や災害図上訓練、また、各学校での防災活動のアクションプラン作成のワークショップ等が行われました。

8月26日(火)には、昨年度から参加しているIV期生の成果報告と今年度から参加したV期生の計画発表が行われました。IV期生からは、各校の特徴を生かしたこれまでの様々な取り組みが報告され、V期生からは、今回学んだことや今後の実施計画が発表され、会場との意見交換を行いました。今後は、12月に活動成果発表の場として高校生防災フォーラムを開催予定です。